

ICTツールの活用で 「自らデザインする力」を 生徒に育みましょう

岩手県立花巻北高校 校長 川村俊彦

かわむら・としひこ 教職歴 37年。同校に赴任して2年目。モットーは「知識ではなく、学ぶ意欲と態度が生徒の将来をつくる」。

AI時代を生き抜くために 自らデザインする力を育みたい

私が勤務する岩手県立花巻北高校は、創立90周年を迎えた2021年度、「100年生きる君たちが花高100年の学びを創る」をテーマに、「学び方改革」を進めています。卒業生の多くが国公立大学に進学する本校は、県内屈指の歴史と伝統を誇り、地域では「花高」の愛称で親しまれてきました。一方で、中学生や保護者からは「花高に行くのと、先生にたくさん勉強させられる」と言われる学校でした。

AIとの共存が求められる時代、生徒たちに必要とされるのは、答えのない課題に粘り強く向き合う力、周囲の人と励まし合い、お互いの潜在能力を引き出すような人間力です。しかし、そうした力は「先生に勉強させられる学校」では身につけません。卒業生でもある私は、本校の学び方改革を決意しました。

生徒、そして先生方に訴えているのは、「夢に向かって自らデザインする学び」を生徒に経験させよう、そのような学びを通して「人生をデザインする力」を身につけさせようということです。本校に入学した生徒は、卒業時のありたい自分の姿をイメージして、3年間の高校生活で取り組むべきTo doと達成すべきCAN-DOを言語化したロードマップの作成に取り組みます。本校では、各教科のシラバスでも、取り組むべきTo doと達成すべきCAN-DOが目指す進路別に明示されているため、生徒は自分のありたい姿や希望進路を念頭に、自ら学習計画を立てていきます。



生徒自身が1日をデザインし、 教師は生徒の変化を待つ

学習計画を実行するためには、学習時間を含めて1日の生活をデザインする必要があります。そこで本校が活用しているのがICTです。本校の生徒は、毎日の朝学習までの時間に、1日の学習計画をClassiに入力し、学習に取り組みます。参加する部活動も、目指す進路も、そもそも学力特性も異なる生徒それぞれに、教師が何をどのくらい勉強すればよいかを指示するのは不可能です。いつ、何を、どのように勉強するかを生徒に委ね、計画通りにうまく学

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

学習計画の自己管理を始めて数か月後、1人の若い担任が、右の「Classi宣言」を作成し、自分のクラスに掲示していました。「自らの生活をデザインする行為が、将来の自分をデザインする力になる」「記録は将来の自分のためのものであり、教員に管理されるものではない」など、生徒に訴えかける担任の言葉に心を打たれました。私は、「ぜひ、これを学校全体のICT活用の宣言とさせてほしい」と担任に相談し、学校全体で共有することにしました。

習が進まない生徒には、個別に相談に乗り、支えればよいというように、教師が生徒を一括して管理する学校から、生徒と教師の信頼関係を基盤に生徒が自己を管理する学校へと転換を図りました。

これまでとは異なる発想による指導ですから、私たちも試行錯誤の連続でした。例えば、先生方の中から「毎日Classiに入力しない生徒がいる。厳しく指導して入力させた方がよいのだろうか」という悩みの声が上がりました。先生方は担任会などで、改めて「なぜ、生徒に1日をデザインする力を育もうとしているのか」を話し合い、Classiを使って自己管理する意義を生徒には丁寧に伝えるが、入力することをノルマのように課すべきではないとの結論を出しました。また、「学習が計画通りに進まない生徒は注意した方がよいのだろうか」という疑問には、自ら学習に取り組む生徒を増やすために「頑張ろう!」と前向きな声をかけ続けることは必要だが、注意は不要。変わらない生徒は、今はまだ変わる時を迎えていないのだと考えて、「強制」ではなく「待ち」の姿勢で引き続き見守っていこうと共通理解を図りました。

学校における個に応じた学びとは、 生徒自らが目標と計画を立て、自走する学び

先生方は生徒の主体的な学習を支えるため、日々教室で、そしてClassiを介して、声かけを続けています。生徒たちに「先生のどんな言葉で、勉強をしようという気持ちが高まったの?」と尋ねると、「先生が自分を見てくれていると感じるような言葉」「自分の意気込みを肯定してくれる言葉」「この調子で大丈夫と言ってくれた時」などと教えてくれました。生徒たちは教師の伴走を得ながら、「夢に向かって自らデザインする」ことの楽しさを味わい始めています。

GIGAスクール時代の学びというと、ICTの活用により、AIドリルなど、生徒一人ひとりに最適な学習課題を与える学びをイメージする方も少なくないと思います。もちろんそうしたことも大切ですが、課題や教材をICTを



※学校資料をそのまま掲載。

通じて提供するだけでは、生徒はいつしかAIに追い込まれ、管理され、結果、1人、また1人と、学習から取り残されていくのではないかと私は危惧します。

多様な生徒が集う学校という場における「個に応じた学び」とは、生徒が自分の目標と計画を立て、自己調整を図りながら粘り強く進めていく学びだと私は考えます。そうした学びを支援するために存在するのが教師であり、ICTはツールとして活用していくべきです。

様々なICTツールを活用することは、生徒の学習環境をより充実させる上で重要です。しかし、「学校における個に応じた学び」の実現には、何よりも血の通った生徒と教師の存在が大切であることを忘れてはいけないと思います。

岩手県立花巻北高校

- ◎設立 1931(昭和6)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約240人



◎2021年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、弘前大、岩手大、東北大、山形大、福島大、筑波大、岩手県立大などに140人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、中央大、日本大、明治大などに延べ151人が合格。